

学問の図書とたち・101 記憶の形 プリント基板のメモ帳 益田文和

裁判員として育つ 荒川 歩 1

航空の二〇〇年・17 空飛ぶベッドフレーム 鈴木真一 7

色と感性 大山 正 8

ニュートン算の功罪 注文の多い雑文 その七 須藤 靖 15

「日本美術史不案内」 空間読めよ 佐藤康宏 24



UNIVERSITY PRESS



5

Number 439, May 2009

東京大学出版会

「近代建築論叢書」5 象徴と自然 庭園の近代 鈴木博之 26

世代をつなぐもの 東京女子大学旧体育館解体問題によせて 森 一郎 33

「知られざるサムライ・アート」——大名庭園展」から 知念 理 39

矢内原忠雄の遺した課題 戦後日本にとつての「国際関係研究」と「沖繩問題」 今泉裕美子 45

すゝしろ日記 第50回 山口 晃 50

学術出版 51 執筆者紹介 52

UP 第三八巻第五号（通巻四三九号）一九〇九年五月五日発行（毎月五日発行）定価一〇五円（本体価格一〇〇円）（二分一〇〇円送料）（別表）

世代をつなぐもの

——東京女子大学旧体育館解体問題によせて

森 一郎

昨年出した拙著「死と誕生 ハイテガー・九鬼周造・アーレント」（東京大学出版会）が、二〇〇八年度和辻哲郎文化賞学術部門の受賞作に選ばれた。過去二十年の受賞者には私の敬愛する哲学者の名前がズラリ並ぶ名譽ある賞であり、光栄に思う。正賞の蒔絵源氏絵千姫羽子板も嬉しいが、なにより副賞百万円と聞いて腰を抜かすほど驚いた。年明けまもなく報せを受けたので、これはもう、少し遅れて年末宝クジが当たったようなものである。子供三人の教育費の足になると、家内と一緒にホッとしたのも束の間、待てよ、こんなことで運が尽きたら困ると思ひ始めた。アブク銭（失礼！）は着服しないで、何かマシなことに役立てたほうが身のためだ。あれこれ悩んだ挙句、使之道を決めた。勤務校で目下発生している旧校舍保存運動のためのカンパに回すことにしたのである。そういう浄財として使うのならばまだ運は尽きないだろうと、内心ほくそえんでいる次第である。

じつのところ、この東京女子大学旧体育館解体問題は、私の日頃考えていることとじかに重なる重要テーマであり、「死と誕生」のなかで論じたことも深く関係している。死すべき者どもにして生まれ出づる者どもであるわれわれ人間は、世界とめぐり合い、そこに住み、ひいてはその世界を次の世代に受け渡してゆく。建物が人びとの集う場として打ち建てられ、永年にわたって使われ続けることは、建築保存論のトピックであるのみならず、（拙著で扱った）可死性と出生性、複数性と偶然性といった根本現象の、いわば応用倫理的意味を有するのである。そこで以下では、紙幅の許すかぎり、この学内問題によせての私見を率直に述べさせてもらうことにした。そもそも拙著刊行に当たっては、東京女子大学から出版助成を受けた。小文はその恩義に報いることになるので、信じてやまない。

大学教師は多忙を言い訳にできない。そもそも scholar とは「ヒマ人」の謂だからだ。忙しい人を自任するとは、学者を廃業したに等しい。学内の古い校舎、とりわけ、解体予定の旧体育館が、建築的、歴史的、教育的にいかに立派な建物であるかを、私が認識するようになったのは、一年ちよつと前のことで、つまり拙著を上梓した直後だった。多忙にかまけて知らずすませていた真実を私に教えてくれたのは、学内での学生研究グループの成果発表会だった。わずか二十分ほどの発表で私は蒙を啓かれた。名手アントニン・レーモンド（一八八八—一九七六。生年は九鬼と同じ。一八八九年生まれの高田テガールとは一年違いで、没年は同じ）が一九二四年に建てた旧体育館が、近代建築としていかに優れているか。たんに体操場としてだけでなく、式典場や舞台としてどれほど機能を發揮してきたか。築八五年のこの「体育兼社交館」に、歴代の卒業生の思いがどんなにまつまっているか。「品格ある社会性の涵養」（A・K・ライシャワー）をめざして一九一八年に創立された女子大の建学の精神が、そこにいかに具現しているか——無知な教員は学生の発表から大いに学んだのである。

この研究グループの代表者は、たまたま私が卒論、修論の指導を担当した院生であった。だから、この発表会以前から、私は彼女から旧体育館解体問題について聞かされていた。だが、多忙を理由にして私はつれなく聞き流していた。彼女の熱意には感じ入っていたので、たまたま空いていた短い時間に研究発

従来から旧体保存を望む内外の声は小さくなかったが、この発表を機に学内教職員の意識は確実に変わった。旧体解体再考を要望する署名運動が起きて教授会メンバーの過半数に達する勢いとなり、六月に理事長に提出された。これに対する理事会の対応については措くが、その後も勢いは衰えず、ついに今年三月、教職員手作りの公開シンポジウムが開催されるに至った。卒業生の永井路子氏や建築史家の鈴木博之氏らをゲストスピーカーに迎え、参加者は二五〇名以上と、会場の旧体に満員の盛況となった。日本の大学で旧校舍保存を訴える学内者主催の討論会が催されること自体、異例のことらしい。シンポジウム実行委員長に名乗りを上げた私は、その開催費用に、和辻哲郎文化賞の副賞の半分を注ぎ込んだ。『古寺巡礼』（一九一九年刊）の著者の名を冠し、しかも天下の名城の保存に町を挙げて取り組んでいる姫路市からいただいた賞を、伝統建築物の維持

森 一郎 死と誕生

ハイデガー・九鬼周造・アーレント

A5判・三八四頁・六〇九〇円
東京大学出版会（表示は税込価格）

表会場に足を運び、——そこで堂々たる発表を聴いたのである。自分の指導する学生が、優れた研究をして嬉しくないはずがない。私は発表後、その院生に「このあいだ提出された修論より良かった」と、半ば冗談を言い、しよげさせてしまったほどである。彼女の名譽のために言っておけば、同時並行的に完成させた修論のシラー研究も、なかなかの出来映えであった。

この年度から、最も優れた研究発表をしたグループには奨励賞を贈ることになっており、彼女たちのグループが見事、栄冠を得た。そして、四月の入学式直後に新入生対象に模範発表を行なった。列席した教員も軒並み感銘を受け、旧体育館解体にそれまで関心の薄かった層に問題意識が広まっていった。その発表では、EXILE という人気グループが「旧体」で踊った曲の P・V も一部披露され、新入生は総立ちになって歓声を上げた。今どきの若者——という言葉をいつしか私も使うようになった——は、ただ新しいだけのものに興味は示さず、古くて良いものに魅力を感じるようだ。まっとうな感覚と言うべきだろう。

と活用について語り合う饗宴のために使ったのは、軽拳でも愚挙でもないと勝手に信じている。

*

なぜ旧体問題にこだわるのか。いろいろな理由があつて言い尽くせないが、一つにはそれが、「世代」という問題にかかわるからである。ひいては、私の見るところ、アーレントの言う「世界への愛」という巨大なテーマの、一つの系をなすからである。

人間はこの世に生まれ、生き、老い、そして死んでこの世を去ってゆく。そういう生まれ出づる死すべき者どもの去来の場合が、世界である。この世界は、一人のものではなく、そこに住む多数の同時代人によつて共有される。そればかりではない。時代を異にする無数の人びとによつて、連続と受け継がれてゆ

く。同時的にも継起的にも「ともに分かれたる」という共同性によって成り立つのが、世界なのである。共同世界のこの二重性は、同世代と世代交代という、世代なるものの二面性に対応している。相前後する世代間の、それどころか相隔たった世代間の、断絶をはらんだ連続性が成り立つのは、諸世代が落ち合う場としての共同世界があるからなのである。幾世代も隔絶した人びとが「協働」したり「連帯」したりすることが可能となるのも、彼らがおのおのの時空的差異をはらみつつ、同じ一つの世界を共有しているからこそである。世界は、複数の世代にまたがって存続する。

世界は、そこに住む人どうしを、そして異なる時代に生きる人どうしを、結び付けさせつつ分け隔てさせる。この「させ」を、あまり抽象的——難しい言葉で言えば「超越論的」——に考える必要はない。世界は、宙に浮いたどこかにあるのではなく、大地にどっしり根ざしており、実質的には、もろもろの存在者からなる。たとえば、埃にまみれた本やひっそりたえずむ古い建物。そこにこそ、世代をつなぐ共同性の基礎はある。

官学のこととは知らないが、私学にはそれなりの創設の父(母?)たちがいるものである。そして、彼らがかつて礎を築いた学園に、いやしくも「建学の精神」というものがあるのだとすれば、それは、そのつどの学校関係者の脳髓や口腔にパツと浮かんで消えてゆく、はかないものではありえない。せい

「諸行無常」とかいった主張に等しい形而上的命題、もしくは「夏草や兵どもの夢の跡」に匹敵する詠嘆を込めた詩句であつて、現に残っている有意義な建物を壊すために使うべきではない。それを念仏よろしく唱えて法隆寺をぶっ壊す者がいるか、と。

じつさいは法隆寺も、そして姫路城も、往時は見る影なく朽ち果て、取り壊される運命に曝されていた。放っておけば腐朽していくのが、死すべき者どもの製作物なのである。だが、そのはかなさに逆らうべくわれわれの手で営々と築かれてきたのが世界なのであり、そのなかで風雪に耐えるよう手入れされて使われ続け、ひいては世界を飾るのが、物なのである。形ある物は、限りある人間の生を超えて、世界にとどまり続ける。私の生まれる以前から、この世界は物とともに有ったし、私の死んだあとも、この世界は物とともに有るだろう。このような世

ぜい一代かぎりの個人的記憶に保たれるだけのものでもない。精神的なものが世代にまたがって脈々と受け継がれるには、その存続を実質的に支え、どっしりと存在し続ける、モノがなければならぬ。創設の志は、かの父祖(母祖?)たちが語り、書き残したことを伝える文書にやどるのであり、始まり・原理(principle)を体現すべく建立された築造物にともるのである。もとより書物は、後代の解釈者によって我がものとされるとき、異化を蒙りつつ「脱構築」されるだろうし、建物だつて、老朽化が進めば修復され、別の使われ方をすることになる。そういう変性や隔たりを許容しながらも、馴染みある近い形をとってしごとく存在し続けるのが、「物」なのである。

大正時代に創られた女子高等教育の府が「品格ある社会性の涵養」をモットーにしてきたのだとすれば、その建学の精神は、設計当初から社交館という機能を付与され、歴代の学生たちに社交の場として使われ続けてきた体育館にこそ、生き生きと働いているはずである。語の正当な意味における本質(essence, *essence*)を集約し守蔵しているそのような物を、荒廃に任せるのみならず、巨大新築事業と引き替えに破壊し去ろうとする学校法人は、少なく見積もっても、建学の精神を忘れていと言わざるをえない。

旧体問題を考える先のシンポジウムで、永井路子氏は面白いことを言った——「形ある物はすべて滅びる」と言つて破壊の口実にする人がいるが、この言葉は「万物は流転する」とか

界概念を、事物の実体性を無批判的に定立する独断論にすぎぬと断ずる向きもあろう。近代哲学のデカルト主義的前提からすれば、なるほどそう見えるにちがいない。だが、ここで言う世界の永続性とは、超絶した形而上的概念などではない。この世に生まれこの世から去つてゆく者たちが、各人の限りある生を超えて「共通のもの」を受け渡してゆく、という暗々裡の共同事業を言い当てる、一個の世俗の言葉なのである。そこには、物を大切にするという意味での「愛」がある。そればかりではない。自分たちがひよっこりそこに生まれ、たまさかめぐり合った世界に対する、限らない慈しみの念がある。自己肯定という意味での自愛と別物でない、その宏き心を、「世界への愛」と呼んでもよからう。

私は自分の今後の仕事を、アーレント譲りのこの言葉で総称したいと思つており、その助走として書いたのが「死と誕生」

である。「世界への愛」の意味するところは私は、五年ほど前のドイツ滞在中、街の美観を守つていこうとする市民たちの姿勢から学んだ。私にとって旧体問題とは、この不思議な愛の私たちの実習だということになる。

聞けば、東京女子大は、東洋の女子高等教育推進のために北米の超教派キリスト教伝道事業によつて募られた寄付金をもとに、創立当初の校舎群を築造することができたのだという（小檜山ルイ「友情の帝国」、紀平英作・油井大三郎編「グローバルゼーションと帝国」ミネルヴァ書房、二〇〇六年、所収、参照）。

そこに「文化帝国主義」を見出すか否かはともかく、海を越えての多額の浄財により創建されたことの意味は、重い。その現存最古の一つである体育兼社交館を壊すとは、インターナショナルかつインターナショナルな「友情のネットワーク」により集められた無数の志を、葬り去ることに等しい。現に存在している旧体は、九十年にわたる国際的・世代間的な連帯の証なのであり、この友愛のしるしを大切に守り将来に贈り与えることは、愛校心の作法にして、世界を愛する仕方なのである。

*

拙著を出すのに多忙を極めたと思いきや、その後旧体問題にのめり込み日々奔走する我が身を省みるに、お前は学者を廃業したのかと呆れられても仕方がない。小文を書いているのは三月

末だが、本誌に載せてもらう五月には、このままだと解体工事が始まってしまふ。そうならないことを切に祈る。もし保存が叶ったら副賞の残りも修復資金に充てると、姫路市での受賞スピーチで公言した身としては、「旧体クジ」がこの先どう出るか、困睡を呑んで見守りたい——というか、愛する学園のため、もうしばらくヒマ人稼業に暇をいせざるをえない。

（もり・いちろう 哲学）

関根清三

旧約における超越と象徴

解釈学的経験の系譜

A5判・五七〇頁・一〇二九〇円

桑子敏雄

風景のなかの環境哲学

四六判・二八〇頁・二九四〇円

小檜山ルイ

アメリカ婦人宣教師

来日の背景とその影響

A5判・三六八頁・五〇四〇円

東京大学出版会（表示は税込価格）